



科学のために

教員 森下正明

近代科学の勃興は、社会の諸変化の直接影響とともに、また人間が自己の理性の眞實に目覚め、おしつけられた観念、著実に基かないドクマから自らを解放した所からはじまる。理性は自然をゆがめられた形ではなく、ありのままの姿で見直すことを教へ

自然の法則はそれらのもろもろの自然現象を注意深く観察し実験することによつてのみ見出されることを明かにした。こうして科学ははじめてその輝かしい発展の道をとることができた。

われわれは科学を愛する。科学を愛するといふ代りに眞実を愛するといつてもよい。尤も愛には必ず行爲が伴ふものとするれば、われわれはむしろ眞実を求めることを愛するといつた方が更によいかもしれぬ。だがその眞実なるものをわれわれは一体どのようにして求めようとするのか。

私はさきに自然現象を注意深く観察し実験すると

いつた。それが第一の要件であることは勿論である。しかしその観察や実験の方法や結果が誤つてゐないことを一体どうして判断するか。あるひは一連の観察から導き出される推論の正しさをどうして保証するのか。「比類のない観察者」としてターヴェンを讃嘆させたマブレルの優れた観察はかへつて彼の進化論反対者としての立場に強固な支柱を与へるばかりであつた。どうしてそのようなことになつたのであらうか。

自然の法則は自然を忠実に観察することによつて自ら掘み出せる筈である。筈であるが悲しいかな人間の眼にうつつた自然はいつも自然の正しい反映とばかりは云へなかつた。花瓣の数が何枚、雄蕊の数が何本といった個々の観察ならまだしも比較的誤りなしに行ひ得るかもしれない。だが花瓣の花と雄蕊の数との関係ともなれば個々の正しい観察を行ひながらも人によつてちがつた結論を生み出さないとはいへないだらう。どれだけの材料を、どんな範囲の、どんな状態での材料を見たか、それからどんな風に結論を導いて行つたか、一つの結論の正しを知るためには徹底した批判が行はれなければならない。事物を広く見る眼と鋭い批判精神が働かねばならない。こうして新く眞実なるものと眞実ならざるものとを見分ける道が開かれるであらう。科学精神とはおよそこういつた批判精神を基調とするものではないか。

しかし眞実なるものと眞実ならざるものを見分け得たとしてもまだ問題は残る。いかにしてその眞実につき進むか。われわれは極威や利害に屈服して眞実を放棄した多くの例を知つてゐる。だが安易な妥協やごまかしは科学精神とはおよそ正反対のものである。眞に科学を愛するものがどうしてそのようなごまかしを許せるだらうか。老年と屈辱に力を失ひながらも「それでも地球は動く」と喧いたガリレイの声を聞くがよい。

科学精神はどこまでも眞実につきすすむことを要求する。しかもその眞実を求める心はたゞにせまい科学の世界だけにどろこめられるものではない。すべての行動に思想に生活態度にそれは現はれてこなければならぬ。科学精神に徹するといふことは、全生活を貫いて眞実を追求する態度をいふのではないか。だから科学者なるが故に科学精神をもつてはなくて、眞実の生活を求めるすべての人が科学精神を持ち得るし、また持たねばならぬといへるであらう。またさうなつてこそ科学はその発展のための広い地盤を見出すであらう。特殊の研究は科学者だ

けが行ふかも知れない。だがその科学者を生み出すものはそのような科学精神の広い地盤である。そしてまたその成果を正当に批判し、自己のものにし、そして更にそれを発展させるのも同じくその地盤である。「科学は萬人のもの」といふのはたゞに科学智識の普及だけを意味するのではないのである。